志村 恵「本の中のふたごたち」⑬

グエン・ドク :『声を聞かせて、ベト』

だいぶ前のことですが、結合型の双生児（俗に「シャム双生児」と呼ばれていますが、もともと現在のタイにあたるシャム出身＜正確には、中国人＞の結合型双生児で、見世物小屋のショーマンとして生きざるを得なかったチャン・エン兄弟にちなんでつけられた名称なので、僕はこの名称は好きではありません)、として 1981 年に生まれたベト君、ドク君が 20 歳になったと聞いて、何だかちょっと信じられない気がしたことがありました。僕の意識の中では、このグエン兄弟はまだ小さい子どものままだったからです。日本における治療、ベト君の健康状態の悪化からのベトナムでの分離手術の決定と実行、そして、手術後二人して懸命に生きようとしていた姿。幼くも頑張っている二人の姿がまぶたの裏に張り付いて、そのまま年齢を加えないでとどまっていたのでした。

さて、今回紹介する本は、二人が 20 歳になったことを記念して、ドク君の手記の形をとった作品です。また、中にはNHK「世界ハート展」に入賞したドク君自身の手になるイラストも収録されています。ドク君がイラストを書くなんて皆さん知っていましたか？僕はちっとも知りませんでした。

この本では、ベト君、ドク君が生まれてから、色々な病院を経て、日本の支援者と出会い、やがてベト君の健康状態が悪化し、分離手術が施されたこと、そしてその後の生活、成長などがわかりやすくまとめられています。幸運なことに、僕の勤めている金沢大学の教育学部付属養護学校に、二人の支援者の一人枡蔵千恵子先生がいますので、本の内容と合わせて、枡蔵先生から直接聞いたことも交えて紹介したいと思います。枡蔵先生は、松谷みよ子さんたちが絵本を作るために、ベトナムにベト君・ドク君を尋ねたときに同行し、それ以来交流を続けている方、ドク君にとっては大事な友人の一人だそうです。このゴールデンウィークにも丁度訪ねてきたばっかりなので、その意味で大変タイムリーでした。

二人は、「ベトとぼくは違う性格をしていた。神様が、ベトを明朗快活な子どもに、ぼくを一人遊びが好きな子どもに、そしてお互いに違う二人が助けあって生きていけるように、違う性格を与えたのだろう」とあるように、「頭と身体が二つ、手が四本、足が二本、性器と肛門が一つ」という体で生まれてきたわけですが、しっかりと二つの人格であるということを自覚しています。また周りもそのように扱ってきたようです（ですから、日本に治療に来たときパスポートが一つだったというのは、納得がいかない気がします)。ベト君がかなり重病になったとき、いよいよ分離を決意しなくてはならなくなりました。そして、分離手術の際に、むしろドク君だけを助けよう、あるいは少なくとも有利にしようという向きもあったようでしたが、特に、ベト君が元気だった頃を知るフォン医師や日本の支援者が、あくまでも二人に平等・公平な形で分離手術をするようにしたことは、本当によかったと思います。このおかげで、ドク君もベト君を犠牲にしてという厳しい人生を、その後送らずにすんだからです。そして、そのことが現在のドク君の自立心旺盛な生活につながっているのでしょう。彼はエンジニアとして働こうとしたり、コンピュータを子どもたちに教える夢を持ったり、また、今度は自分が障害者のためのボランティアになったりしています。

「ぼくは障害者ではない。ふつうの人だ」と書いているように、たとえ結合型双生児という一見過酷で特別に見える運命の下に生まれ、さらに命をかけた分離手術を経たとしても、ドク君は、どこまで行っても「ふつうの人」だし「ふつうのふたごの仲間」だと思います。そして、そのことを少なくともベト君が入院しており、ドク君が一緒に暮らしているホーチミン市のツウゾウ病院のスタッフや家族は、

よく理解し、受け入れているようです。ですから、ドク君も厳しくしかられたり、きっちりとした要求を受けたりするようです。また、ベト君に対してもドク君は自然に接し、前述の枡蔵先生によると、見ている者がハラハラするぐらいの扱いをするほどだといいます。ふざけたり、ベト君の寝ているベッドに飛び上ったりと。

その意味で、ドク君が普通の学校にも通い、特別視されたり、いじめられたりをも経験しながら、だんだんと成長していく様子は大きな励みになります。しかも、彼の視点で描かれているのでなおさらです。ドク君はサッカーが大好きなこと、技術者として働いていること、大きくなってからボランティアの活動をしていること、友達のこと、恋のこと、そして何よりもベト君のこと。これらが実に素直で簡潔な言葉で綴られていきます。また、その読みやすい文章の後ろに、人間への大きな信頼感と平和を願う心、それから、社会の一員として生きる人間の意気込みのようなものが感じ取れるのです。

松谷みよ子の『ベトちゃんドクちゃんからのてがみ』によれば、「ドクちゃん・ベトちゃんの発達を願う会」の藤本氏と河原氏がこの会を立ち上げ、現在にいたるまで支援を続けているのは、ベトナムに対する日本の責任を重く受け止めているからだといいます。つまり、グエン兄弟の「畸形」の原因が直接には日本の基地から飛び立ったアメリカ軍航空機による枯葉剤（含ダイオキシン）散布によるからであり、また、第二次世界大戦中日本が半ば強制的にベトナムから米を買い上げたために、200 万人のベトナム人を餓死に追いやった歴史的な背景があるのです。最近、歴史教科書をめぐる議論が様々になされていますが、「願う会」のこうした国際協力のスタンスは、何と大きな勇気と示唆を与えてくれることでしょうか？自国の責任に真摯に対応することで、どれだけ日本への信頼と敬意を得ていることでしょうか？ふたご・多胎児とその家族にかかわってくださっている方は、色々いらっしゃるのですが、そうした方の多くが親切で誠実であることが多いことと、何かしらつながりがあるような気がします。

この本の印税は、ベトナムの障害を持った子どもたちのために使われるそうです。その意味でもぜひ買って読んでいただければ幸いです。

グエン・ドク :『声を聞かせて、ベト』PHP。
松谷みよ子 :『ベトちゃんドクちゃんからのてがみ』童心社。

『ツインズ』38 号（ビネバル出版）から転載・修正